

# 徳之島における闘牛の意味

松山由香里

北九州大学文学部人間関係学科

## 要旨

鹿児島県の徳之島は闘牛が盛んな地域である。闘牛とは牛同士の闘いである。徳之島における闘牛も、他の地域における動物を用いた闘い同様に勝敗にこだわるものである。しかし、他の地域における動物たちが戦闘という遊戯の駒のひとつにすぎず、負ければその場で処分されるのに対し、徳之島の闘牛は島の人々から家族同然の存在として扱われる。

インドネシアのバリ島における闘鶏を調査した人類学者ベイトソンとミードによれば、バリ人男性にとって雄鶏は彼そのものであり「自立して動くペニス」または「それ自身生命をもつ動く性器」であるという(ベイトソン 1942)。しかし、勝負に負けた場合、彼自身であるはずの雄鶏はその場で片足をもがれ殺される。それとは対照的に、徳之島の闘牛はたとえ試合で負けたとしてもそのようには扱われない。

また、徳之島の人々にとって闘牛という営みは闘い以上の重要な意味を持つ。人類学者のギアーツはバリ島における闘鶏に関して、「闘鶏の機能は、もしそう呼びたいのなら解釈である。闘鶏はバリの経験をバリ風に読みこんだものであり、彼ら自身による彼ら自身の物語である」と述べている。そして「闘鶏に行き、これに参加することは、バリ人にとって一種の感情教育」であり、そこでバリ人たちは「文化的特質と個人的感性がいかなるものであるかを知る」と主張している(ギアーツ 1987)。

本稿では上記のギアーツの闘鶏に関する見解を、徳之島の闘牛の分析に援用する。ギアーツが述べた「感情教育」と「文化的特性」、そして「個人的特性」などの概念を徳之島における闘牛に当てはめ、徳之島の闘牛とバリ島の闘鶏を比較し、その類似点と相違点を指摘する。

## 目次

はじめに	第二節 大会当日
第一章 闘牛の起源と分布	第三節 闘牛場の光景
第二章 徳之島の闘牛	第四章 考察
第一節 徳之島の概要	第一節 バリの闘鶏と徳之島の闘牛
第二節 徳之島の闘牛大会	第二節 徳之島における闘牛の意味
第一項 取り組みの決定	第一項 バリの闘鶏の表すもの
第二項 大会の執り行われ方	第二項 徳之島の闘牛の表すもの
第三項 勝敗の決し方	第五章 結論
第三章 牛を巡る人々	謝辞
第一節 大会前日	

## 引用文献

はじめに

鹿児島県の徳之島では闘牛がおこなわれている。闘牛とは牛同士の闘いである。2匹の黒牛が土煙をあげつつぶつかりあう光景は迫力に満ちたものである。

闘牛は世界各地で行われている。韓国やインドネシアも闘牛が盛んな地域である。

また、闘牛の他に別の動物を用いた闘いがあらゆる地域でおこなわれている。日本においては闘牛の他に闘犬、闘鶏、闘蜘蛛が存在している。インドネシアにおいても闘鶏は盛んであり、他方、中国やタイでは闘コオロギもおこなわれている。

徳之島における闘牛も、他の地域における動物を使った闘いと同等に勝敗にこだわるものである。しかし、他の地域における動物たちがあたかも使い捨てがきき、戦闘という遊戯の駒のひとつであるのとは対照的に、徳之島の闘牛は島の人々から家族同然の存在として扱われている。

インドネシアのバリ島における闘鶏を調査した人類学者ベイトソンとミードによれば、バリ人男性にとって雄鶏は彼そのものであり「自立して動くベニス」もしくは「それ自身生命をもつ動く性器」であるという（ベイトソン 1942）。しかし、勝負に負けた場合、彼自身であるはずの雄鶏はその場で片足をもがれ殺される。それに対し、徳之島の闘牛はたとえ試合で負けたとしてもそのようには扱われない。

また、徳之島の人々にとって闘牛という営みは闘い以上の重要な意味を持つ。人類学者のギアーツはバリ島における闘鶏について、「闘鶏の機能は、もしそう呼びたいのなら解釈である。闘鶏はバリの経験をバリ風に読みこんだものであり、彼ら自身による彼ら自身の物語である」と述べた上で、「闘鶏に行き、これに参加することは、バリ人にと

って一種の感情教育」であり、そこでバリ人たちは「文化的特質と個人的感性がいかなるものであるかを知る」と主張している。

本稿では上記のギアーツの闘鶏に関する解釈を、徳之島の闘牛の分析に援用する。ギアーツが述べた「感情教育」と「文化的特性」、そして「個人的特性」などの概念に用い、徳之島における闘牛とバリ島における闘鶏を比較し、その類似点と相違点を指摘したい。

本稿で用いるデータは1999年8月11日から8月23日、2000年10月13日から10月24日までの2回、のべ25日間にわたる調査で得られたものである。筆者は、鹿児島県大島郡徳之島町に滞在し闘牛を取り巻く人々に直に接触して参与観察法による調査をおこなった。

## 第一章 闘牛の起源と分布

エジプトの壁画に牛と牛の闘う姿が描かれていることから、闘牛の起源は古代エジプトにおける神事にまで遡るといわれている（松田 1982）。また古代ギリシアにおいても闘牛は古くからおこなわれていたという。

8世紀になるとムーア人によって北アフリカからスペインに闘牛がもたらされた（松田 1982）。この場合の闘牛は牛と闘牛士が闘うものであったという。このような闘牛はスペインの他にも、フランス、ポルトガル、ペルーなどでもおこなわれている。

現在の日本において闘牛の行われている場所としては、沖縄県（本島・石垣島・与那国島）、鹿児島県（徳之島）、島根県（隠岐）、愛媛県（宇和島市）、新潟県（小千谷市・山古志郡）がよく知られている。

しかし、かつては奄美大島でも闘牛がおこなわ

れていたと考えられる。たとえば、嘉永3年(1850年)に、奄美大島へ遠島の刑に処せられた薩摩藩士・名越左源太の『南島雑話』には「八月拾五日九月九日の遊日、島中牛を集め闘する、是を牛とらせと云。闘に弱きは即殺して喰ふ」と記されている。

また、天明2年(1782年)の秋から1年にわたって山陽道、九州、四国を漫遊した橘南谿はその著書『西遊記』に「薩摩鹿野屋といふ所には牛合(うしあはせ)といふ遊びあり、上方の鶏合(とりあは)せの如し、牛を双方(さうほう)より出して戦はしめて見物することなり」と記している。鹿野屋は現在の鹿屋市上谷付近と思われる。したがって、鹿児島県本土のほうでも闘牛がおこなわれていたと考えられる。

闘牛の起源については地域によって説が異なる。以下に各地の説を紹介する。

#### 沖縄の闘牛(ウシオーラセー)

沖縄における闘牛発祥の記録はないが、『沖縄の闘牛』(1972)の著者である前宮清好は、闘牛発祥地として牧港一帯をあげている。前宮によると、牧港は英祖王統(1260~1349年)の頃からの貿易港であり、外国との文物の交流が盛んにおこなわれ、牛も早くから取引されていたという。前宮は「牛はこの牧港一帯で一番早く飼われるようになり、自然に突き合う習性があることから、通りがかった人が興味を覚え、最初は面白半分に関わっていたものが、いつしか周囲の人たちにも好奇の眼でみられるようになり、次第に人気が出て闘牛というひとつの娯楽が生まれたのではないかと述べている。

#### 隠岐の闘牛(牛突き)

東から島後、島前(中ノ島、西ノ島、知夫里島)の4つの島よりなる隠岐の闘牛発祥については、後鳥羽上皇の慰めのために始まったという説が有力である。「承久の乱」に敗れた後鳥羽上皇は北条義時によって隠岐へ流された。上皇の船が島前・中ノ島に着いたのは承久3年(1221年)8月5日であった。翌日、行在所と定められた勝田郷の源福寺に向かう途中、牧場で3頭の子牛が角を付き合っているのをご覧になり、たいへん興味をもたれた。このことを知った島民は、時折、牛を闘わせて上皇をお慰めしていたが、後には闘牛をご覧になった8月6日におこなうようになった。上皇が亡くなられた後も、島民は毎年上皇の忌日(2月22日)には御陵付近で牛突きを催し上皇の霊を慰めてきた(松田 1982)という。

隠岐の闘牛の特徴は、鼻綱を切らずに関わせることと、生まれた牛の角をゴムバンドで固定し、まっすぐの天角に統一することである。鼻綱をつけたまま闘わせる理由は、上皇の安全を考慮して牛が逃げたり、暴れたりしないようにしていたなごりであり、角を固定する理由は、将来の牛の安全性を考慮してということである(小林 1997)。

#### 宇和島の闘牛

城辺町誌編集委員会による『城辺町誌』(1966)によれば、「200年ほど昔、オランダの船が暴風雨に遭い、西海町鼻面岬付近で漂流しているのを、福浦の漁師が発見し救助した際に、船長がそのお礼としてオランダ牛2頭をくれた。年がたつにつれて牛の数が増え、福浦牛と呼んだ。これが南部全域に広まり、深浦や僧都でも放牧され、御荘牛といわれるようになった。放牧の牛はお互いが突き合って、強弱を決める死闘をおこなう習性があった。この自然の習性を利用して、娯楽としての闘牛が始まった」とある。

## 新潟の闘牛（牛の角突き）

『徳之島の闘牛』には、「先住民族のアイヌ人の祖先が満州にいたとき、闘牛をして神を祭っていた。日本に移住してこの地に住んでも、お祭りになると闘牛をして、負けたほうを喰っていた。今の牛の角突きは、その真似をして始めた」という説が載っている（松田 1982）。「この地」とは、現在も闘牛がおこなわれている新潟県古志郡山古志村地方のことである。

また他にも、「二十歳村（山古志郡と小千谷市の古称）は古くから岩手県の南部地方と交易が盛んで、南部商人は赤毛の南部牛に南部鉄などの商品をくりつけて二十歳村に来ていた。商品を買って牛も売ってしまう。南部牛は寒さに強く、粗食に耐え、新潟でも有数の豪雪地であるこの地に適し、家畜として重要性を増していった。南部牛は角突きを好む種類であり、村人は作爲的に闘わせるようになった」（小林 1997）という説もある。

新潟の闘牛は、勝負を全て引き分けにすることが特徴である。「一方の牛が危ないと見れば直ちに引き分ける。引き分けの要領は、足取り、角取り、鼻取りとこの3つが一体になってはじめてうまく引き分けられる。引き分けは勢子（牛取若衆）がおこなう。勢子は東西17名ずつ計34名が闘牛場に入ることができる。東西の勢子頭が、互いに合図をし、相手方の牛の足にかけた綱を引っ張る。同時に30数人の勢子が角、鼻、首、そして足にかけた綱をとりに行く。引き分けがまずいと喧嘩になることもあり、うまく分ければ満場の拍手となる」（松田 1982）とのことである。

古来から産土神の祭礼の際に牛の角突きをおこない神霊を慰めてきたのであり、勝負をつけるのが目的ではないからというのが引き分けにする理

由である。昭和53年5月に、国の重要無形文化財に指定された（松田 1982）。

## 徳之島の闘牛（ウシトロシ）

徳之島の闘牛の由来についてははっきりした記録が無く、いつの時代から始まったものか不明である。徳之島闘牛連合会元会長の米川正雄氏は、「牛は古くから農耕用として役立っており、そのなかで自然に闘牛が発生し

たものと思われる。放牧、農耕のなかで牛が角を合わせて喧嘩をする姿を見た飼主達が、申し合わせをしたり、あるいは作爲的に牛を闘わせたりしたのが始まりだろう。このように飼主達が申し合わせで楽しんでいるうちに、やがて家族の一統や近隣、友人達の間で楽しむようになり、次第に各村落に広がり、ついには部落の対抗戦となり、島全体の娯楽へと発展し、今日に至ったものと思われる」（米川、1982）と述べている。

しかし徳之島観光連盟発行のパンフレット『闘牛と長寿のふるさと 徳之島』（1999年版）には、闘牛の由来として「闘牛は古く、藩政時代の頃からおこなわれ、約500年の歴史があるといわれています。砂糖地獄に苦しめられた農民が、ようやくの思いで税として完納できた収穫の喜びを祝っておこなわれたといわれ、島民の唯一の娯楽でした。それだけに闘牛に熱い情熱を傾け、牛はもちろん、勢子（せこ）観客が一体となり盛り上がり上げていき、勝牛の手舞いが一層の興奮をさそいます」と載せられている。「砂糖地獄（さたじごく）」とは、徳川幕府時代に財政難の薩摩藩がおこなった黒糖の強制的な収奪のことである。過酷な労働の中で島民の心を慰めたものが島唄と闘牛であったという話は、現在でも語り継がれ、祖先に対する畏敬の念を強めている。

実際、徳之島の古老たちは闘牛のことを「なぐさみ（慰み）」と言う。方言では「ウシトロシ」（「ト

レ」が戦うという意味であり、闘鶏は「トリトロシ」である）と言うのにもかわらず、「いいなぐさみぐわあていや（いい慰みであったなあ）」と言うのである。

「牛は家、一族の宝であり、家の繁栄の象徴」であると牛主は語る（松田 1982）。先祖に対する慰めのために、牛に勝ってほしいと強く願うのである。

筆者は徳之島で、自分の牛を持っている高校生の女の子と知り合い、その子の家で飼っている牛について話を聞いた。牛には親が経営している喫茶店の名前がつけられていた。

女の子 「あの牛はだめだよ。前（大会に）出したとき、闘おうとしなかったもん」

筆者 「闘争心がないのね？」

女の子 「練習ではやる気を見せて強そうだったんだけどね、闘牛場に入ったらお客の声援がすごくて」

筆者が「びっくりしたんだねえ」と言うと彼女はうなずき、「相手の牛に乗ろうとしたんだよ、恥ずかしい」「なんで 号（店の名前）なんてつけたんだろう、うちの牛だってすぐわかるよー！もう、恥ずかしい！」と言い、「恥ずかしい」を何度も繰り返した。

牛が持ち主の家を表すという意識があるからこそ、「恥ずかしい」という言葉が出てくるのである。

「得取いゆか名アとれ」という徳之島の古い格言がある。利益を取るよりも、名声を取れということである。強い闘牛を持つことが名声を取ることにつながり、多くの人を喜ばすことにつながる徳之島では、全島一の横綱牛を持つことが島に生まれた男の夢である（松田 1982）。

牛主は自分のため、家族のため、応援してくれる

人々のため、そして先祖のために、牛を勝たせたいと強く思うのである。

## 第二章 徳之島の闘牛

### 第一節 徳之島の概要

徳之島は、鹿児島県本土から南へ約468kmの海上に浮かぶ周囲84kmの島である（徳之島観光連盟 1999）。奄美群島のほぼ中央に位置し、奄美群島の中では奄美大島に次いで二番目に大きな島である。徳之島町、天城町、伊仙町の3町からなり、人口は約3万人である。

### 第二節 徳之島の闘牛大会

#### 第一項 取り組みの決定

徳之島における闘牛の番付は日本相撲協会に準じ、前頭より横綱までである。ひとつの大会で7～15の取り組みが組まれる。

闘牛大会のおよそ1ヶ月前、主だった牛主達を集めて取り組み編成会議がおこなわれ、組み合わせが決められる。しかし、自分の牛を勝たせたい牛主達の希望が合わず、交渉が難航することもあ（石垣市・玉代勢光子さん談）。

取り組み編成会議では、横綱戦、大関戦というように番付の高い順に取り組みが作られていく。花形や関脇までの牛主は対戦相手の希望を出したり、指名したりできるが、横綱、大関の対戦相手は理事たちが決め、牛主は希望も拒否も意見も許されない（小林 1997）。

取り組みが決まると、闘牛関係者にB4（大きな大会ではB2）ほどの大きさのポスターが配られる。大きな大会になればなるほど色を多用したり、出場牛の写真を入れたり凝ったものになる。牛主の自宅、会社、闘牛組合、闘牛場近くを歩けば自然とポスターが目につくようになる。また、闘牛大会専用の宣伝カーが「世紀の対戦、〇〇号対〇〇号！」とアナウンスしながら島中を走り回るので、闘牛大会へ向けての雰囲気が高まっている。

くのである。

## 第二項 大会の執り行われ方

戦前までは牛主同士が相談しあって、島の行事（正月、5月の節句、十五夜など）の日に浜や川原、荒畑で催していた。

昭和23年に徳之島闘牛組合が設立され、入場料を徴収するようになると、主催者が牛主へ牛の輸送費やまかない料として出場料を出すようになった（小林 1967年）。牛の出場料は、横綱級で約100万円である（松田 1982年）。入場料は、通常の大会で大人2500円、中学生以下1000円であり、全島大会で大人3000円、中学生以下1000円である。

闘牛大会は、ほとんどが午前10時開始である。全島大会のおこなわれる1月、5月、10月は大会が目白押しとなるので、午前10時（ときに9時や9時半開始もある）の大会のあと14時または15時からもうひとつ開催されたり、ナイター設備の備わったドーム闘牛場で18時から開催されたりする。

大会に参加する牛は原則的に、最初の取り組みの1時間前には場所入りすることになっている。闘牛場の付近には待機用の牛舎が備わっているので、牛主や家族は持ち牛の出番までそこで集まってくれた親戚、友人と共に過ごす。牛舎での様子は様々で、牛の角研ぎをしたり、茶を飲ませたり、軽く餌を与えたり、それぞれのやり方で出番を待つ。

取り組みが開始される前、全ての牛というわけではないが、1頭ずつ牛主に引かれて土俵内に入る。牛に土俵の大きさ、足場の感触を参考にさせるためであると島の人は言う。

牛の入場の際、親族の中で靈感の強い人間が先頭にたって塩を撒き、牛の歩く道を清めていく。

応援の人々は「ワイド、ワイド」という徳之島独特の掛け声をかけながらチヂンという島太鼓を鳴らし、ラッパを吹き、指笛（はと）を鳴らし、こぶしを握った両手を力強く上げ下げし（手舞という）、牛の気持ちと自分達の気持ちを高揚させる。

徳之島郷土研究会会員の松山光秀さんは「いわゆる闘牛にはつきもの手舞であるが、威勢のいいこの囃子踊りは、目的地に着くまで間断なく続けられる。すると牛のほうもちゃんとそれを知っていて、戦意が次第に昂まっていき、目の色の輝きが増してくるのだという。人間と牛のえもいえぬ意気投合の瞬間である。そして、このような両者の心意気のきずなはさらに広がっていき、牛も人も混然一体となった同族意識にまで高められていくのである。ここまでくると、もう牛は単なる牛ではない。一族の名誉を担う象徴的な存在として人々の間に息づいてくるのである。なんとすばらしい心の触れ合いであろう。このような目に見えないきずなが底流にあるからこそ徳之島の闘牛はいまもなお延々と続いているにちがいない」（松山 1982）と述べている。

入場は、どちらの牛からでも良い。ただ、筆者が観戦した2000年10月22日の大会は先負の日であった為に、牛主達が相手よりも先に入場することを渋り、大会の進行が難航していた。

## 第三項 勝敗の決し方

両雄が土俵に入る。牛歩の歩みで入場する牛もあれば、駆け足で入場する牛もある。走ってきた勢いそのまま組み合う場合もあり、睨み合ったままお互いの出を覗い、なかなか組み合わない場合もある。

角を突き合わせた瞬間から対戦タイムが計られる。組むのを嫌がれば相手牛の不戦勝となる。対戦タイムは、早くて数十秒、長いときは1時間近くも

闘うことがある。筆者の見たところによると、だいたい10～20分で勝負がついていた。

牛は、自分の牛舎を出てくるときからずっと鼻綱をつけている。鼻綱をつけたまま闘わせる地方もある（新潟、隠岐、沖縄の地方大会）が、徳之島では戦闘開始後、牛が本気になった場合をみて勢子が鎌でサッと切る。

勢子とは、他の地方でいう「闘牛士」のことである。牛の横にぴったりとつき、牛の体を叩いたり足を強く踏み鳴らしたりしてけしかけ、さすって平常心を取り戻させ、掛け声をかけて攻撃するタイミングを知らせる役割を担うのである。

牛は角を駆使して相手を攻撃し、勝敗の決し方は、相手が尻を向けて逃げたら勝ちという、わかりやすいものである。

### 第三章 牛を巡る人々

#### 第一節 大会前日

筆者は、2000年10月21日の闘牛大会の前日に、ある牛主宅に宿泊し、前祝いの準備から当日の用意までを手伝った。

前祝いには親類、友人が祝いの金品を持って集まってくるのが徳之島の慣例となっている。のし袋のついた黒糖焼酎やビールケースが部屋の中に次々に積まれていく。現金を包んで持ってくる人もいる。それらは、翌日の試合に対する祈願の言葉と共に手渡される。

家に上がる前に、盆に盛られた塩を差し出された。塩が清めに使われることは知っていたので、筆者が体にふりかけようとする、「違う違う、ヤマトンチュ（大和人、本土の人のこと）はわからないんだから、教えてあげて」と牛主の奥さんが言った。筆者の横にいた人が塩をひとつまみし、「食べて、残りを体にふりかけるんだよ」と教えてくれた。

女性は台所のテーブルに集まり、男性は座敷で

くつろいでいた。主に女性が料理や酒を運ぶ役割を負っていた。牛の話、雑談（噂話や冗談）が3：7くらいの割合で話されていた。

誰かが「明日勝ったら、牛の背中に乗せてあげるよ」と筆者に言った。牛主の奥さんが「勝ったらじゃない、勝つから」と言い直させた。話す言葉も験をかつぐのである。「明日勝つから、牛の背中に乗せてあげるよ」とその人は言い直した。

#### 第二節 大会当日

2000年10月22日の大会当日、女性達は午前6時30分頃に起床した。まずは牛に飲ませるお茶を牛主の奥さんが沸かした。次に、牛主の奥さんとその妹、そして牛主の娘とその友人の女の子と筆者の5人で、おにぎりを約20個作った。おにぎりはまん丸に握った。奥さんによると、「丸く勝つように」という意味だという。食事のひとり分は、大きなおにぎり1個とおかずが5つであった。おかずの数は4を避けたうえでの5個である。

「カツをなるべく多く入れて」

奥さんは最善の注意を払いあらゆる個所で験かづぎをした。

牛主の家に昨日のメンバーが再び集まり、7時30分に出発した。牛を載せたトラックの後ろに何台も車を連ねて走った。牛は時速30km～40kmで慎重に運んだ。

闘牛場のすぐ裏にある牛主の親戚宅で朝食をとった。家を出るときは牛の準備、料理の準備などで大忙しだったので、朝食を食べる暇などなかったのである。ここで、アルミホイルに包んだおにぎりとおかずが登場した。家の奥さんも大量の料理とお菓子を用意してくれていた。皆が料理をほおぼる横で、牛主は「胸がいっぱいで食べれん」と言い、牛の様子を見に待機小屋へ向かった。

大会は10時開始であった。筆者が関わっていた家の牛は特別封切り戦に出場だったので、10時すぎに闘牛場に入ることになっていた。

10時が近づくにつれ、人々の緊張感が高まってくるのが感じられた。皆口数が少なくなり、1点を見つめて物思いにふけるようになっていた。たまに我に返り、冗談を交わす。牛主の奥さんは「ドキドキしてきた」「胃が痛い」としきりに繰り返す。何度もトイレにたつ。

この場で励ましの言葉をかけることは、大して意味をなさないと思筆者は思った。「勝ちたい」と皆が思っていることは明らかな中で、「勝ったらいいですね」と言うのは他人事という意識を匂わせるし、「勝ちますよ」と言えるほどの根拠も持っていないで、何も言わず人と視線が合ったときにただうなずいてみせることしかできなかったのである。

牛を入場させる時がきた。露払いが塩を撒き、勢子が牛の鼻綱を引き、牛主ら主だった人達がチヂンという島太鼓を叩き、まわりの人々が指笛を鳴らした。

女達は集団の一番後ろについていった。筆者は、自分に「女」という色がついているのではないかと思ってしまうくらい、ずっと女達の中にいた。まるで、男達が戦いに出る直前に居合わせたような心持ちでいた。

しかし、応援した牛は負けてしまった。勝ち牛側が手舞・足舞をし喜びに酔う横で、負けた側はそそくさと帰るのだ。入場するときと同じく、牛の後を追った。しかし入場のときは走って、元気よく追ったのに対し帰りは、言葉にするのは難しいが、「自分の居場所がない感じ」であった。

「手舞できなかったね」と牛主の奥さんが微笑みを浮かべながら言った。筆者は返事に困った。またもや、ただうなずくしかできなかった。

引き上げてきた後の雰囲気は、寂しそうで、力の抜けた感じで、かといってそれほど深刻ではなく

(番付の一番下だったからかもしれない)、冗談を交わせる余力はあった。「笑ってすまそうよ!」「お弁当余っちゃう」と牛主の奥さんは笑顔を見せる。

牛主の奥さんが「ちゃん(筆者と奥さんの共通の知り合いである男性)見つけた?近くに座れそう?」とふいに聞いてきた。「見てないですけど、たぶん柵際でしょう」と言うと、「じゃあ、お弁当持ってって。ちゃん(その男性の奥さん)の分と3人分」行け行けという目をしていたので、筆者はひとりで闘牛場へ行くことにした。もっと牛主達をそばで観察したかったのだが、筆者がいては牛主達は語ることも沈むこともできないのだということに気づき、場を離れることにした。

### 第三節 闘牛場の光景

ある2頭の闘いで、一方の牛は親族らしき人々に囲まれて入場してきた。一方の牛は、賑やかに太鼓、ラッパを鳴らす20歳前後の青年達に囲まれて入場してきた。青年達はお揃いのハッピを着、元気いっぱいであった。それに比べて先に入場していたほうは、地味に映った。結果は、先に入場したほうが勝った。青年達はすこすこ退場した。勝ち牛側が手舞をはじめた。おじいさんが牛にまたがり、こぶしを握って喜びを表した。牛の横でおばあさんが嬉しそうな顔をしながら、踊った。

筆者はそのおばあさんの表情が忘れられない。喜びを心地よく受け止め、自分の心の中の思いが自然と出たような、そんな表情だった。あんなに嬉しそうな顔をする人を見られたということだけで、その大会は満足だった。

帰り道、一緒に観戦した闘牛愛好家の人と話をする中で、その取り組みの話になった。「おばあちゃんの牛のほうが勝ってよかったよね」とその人は言った。その人も筆者と同じく、おばあさんの嬉

しそうな表情を嬉しい気持ちで見ているのだ。「嬉しそうでしたよね」と言うと、「そうだね、あそこ（の家）は、昔から牛を飼っているところなんだよ。牛に乗って手舞をした人が牛主の　　さん。愛牛家として有名な人だよ」と説明してくれた。

#### 第四章 考察

##### 第一節 バリの闘鶏と徳之島の闘牛

ギアーツは闘鶏の場におけるダイナミズムを17のカテゴリーに分類した。これらのダイナミズムを徳之島の闘牛に当てはめて考察してみる。

- (1) 男は自分の親族集団の成員が所有する鶏に対抗して賭けるようなことは決してしない。人は常に親族の鶏の方に賭ける義務を感じており、親族のつながりが近ければ近いほど、試合が深ければ深いほど、その義務感は強い。
- (2) この原則は論理的に拡大される。自分の親族集団が関係していなければ、自分の集団と結びついていない親族集団に対抗し、自分の集団と同盟関係にある親族集団の方を同じように支持する。
- (3) 同様なことが村全体についてもいえる。よそ者の鶏が自分の村の鶏が自分の村の鶏と闘う時は地元の鶏の方を支持する。またまれに闘鶏地域の外からの鶏が地域内の鶏と闘う時もやはり「うちの鶏」の方を支持する。」

上記の(1)、(2)、(3)の項目に当てはまる事例として、「応援にこない親戚とは縁を切る」という話をあげられる。また、亀津在住の闘牛愛好家は、闘牛大会の際に知り合いの牛主と地元の牛主の牛が対戦することになったので、「どっちを応援したらいいのか困っちゃうよ」と言っていた。彼は、大会前日の前祝いには一方の牛主の家に早めに顔を出し、「用事があるから」と途中で引き上げ、その足でもう一方の前祝いに向かっていた。大会当日もあちらこちらの待機小屋に顔を出し、夜は勝った方の牛主の家に駆けつけていた。

- (4) 遠くから来た鶏はほとんどいつも本命である。というのは、良い鶏でなければわざわざ遠くからもって来るようなことはしないという理論が成り立からだ。遠ければ遠いほどその度合いは大きい。鶏をもって来た男にしたがって来た者たちは当然その男を支持する。もっと大規模な合法的闘鶏が催されると(休日など)、村の人々は村で一番と思われる鶏を所有者が誰であろうと構わずもち出し、それを支持するために出かけてゆく。彼らはずっとその鶏のために賭越しを与える側となり、自分たちがけちな村の出身でないことを示すよう、大きな賭をしなければならぬ。こういった「出張試合」はそうしばしばおこなわれるものではないが、一方でいつも開催される「うちの試合」が、村の派閥を統合するよりも対立させ、悪化させがちな村の成員間の不

和を「出張試合」が改善する傾向にある。

闘牛の世界においても、他の地域の強い牛と対戦できる例が多くみられる。遠征として、牛を他の地域へ送り込む場合もあれば、その逆もある。親善試合として地域対抗で対戦を組む場合もある。

どの地域の闘牛関係者も「わが地の闘牛こそ文化的にも実力的にも日本一である」という誇りをもっている（小林 1997）。そのため、バリの人々と同じく「本命」の牛を持ってくる。

通常、取り組みを決定する際は「取組編成会議」で牛主達がそれぞれ都合の良い条件を言い合うのだが、「わが地の名譽」がかかる親善試合の場合はそのような言い合いはなく、牛の成績や体調を考慮して納得できる牛の選出をおこなう（小林 1997）。

バリでの「村の派閥」というものは、徳之島では特に感じられなかった。ただ、どの集落から横綱牛が出たかということをも闘牛愛好家たちは熟知しており、「地区から闘牛の横綱が出たのは有史以来初めて」（加川 1999）という文章が地元発行の雑誌に掲載されていた。

- (5) ほとんどすべての試合は社会的な関連性をもっている。二羽のよそ者の鶏が闘うことや、二羽が特定の集団の支持なしに闘うこと、あるいは互いに明確に無関係な集団の支持を受けて闘うことはほとんどない。もしそういう場合があるとすると、それは非常に浅い試合で、賭けは極めて緩慢におこなわれ、すべてが不活発で、直接の関係者と一、二人の耽溺的賭博者を除け

ば誰も興味を持たない。

バリにおける闘鶏と同じく、よそから遠征に来た牛同士を徳之島の闘牛場で闘わせることはない。出身が他の地域であっても牛主が徳之島の間であつたら、遠征と異なり、「徳之島の地区の牛」とみなされる。現在は闘牛をおこなっている地域同士の牛のトレード、買い付けは非常に盛んであるので、出身地からさまざまな地を經由して入ってくる牛も多いのである。

バリ同様、徳之島の闘牛も特定の集団の支持なしに闘うことはない。「徳之島では牛を応援しにこない親戚とは縁を切る」という話が、親戚ならば牛を応援しに行くことと決まっていることを示している。しかし、徳之島では無関係な集団の支持を受けて闘うことがよくあるという点が、バリと異なる点である。牛主と何の関係も持っていないくても、牛自体のファンであれば堂々と応援する。

- (6) 同じ集団に属す人々の二羽が闘うのも珍しいことで、同じ下部集団から出ることはさらに珍しく、さらに小さい下部集団(多くの場合一つの大家族)から二羽が出て闘うことはまず決していない。同様に村外の試合で、同じ村の二人の成員が鶏を闘わせることは稀である。たとえ地元では熱狂的に激しいライバル同士であっても、それは稀である。

「同じ集団」というのを徳之島で「同じ集落」に置き換えて考えると、同じ集落に属す人々の二頭が闘うことは、バリと同じく珍しいことである。練習試合はさせるが、大会で戦わせることはほとんどないと島の人には言っていた。しかし、全島一決

定戦では同じ集落の2頭が闘っていたという事実から、全島一の重みは集落のつながりという重みを上回るものと考えられる。

「同じ下部集団」は徳之島で「親戚集団」に置き換えられる。徳之島の人々は親戚とのつながりを非常に大切にするので、親族同士の牛を闘わせることはない。「勝っても心から喜べないから」と島人は説明する。

「さらに小さい下部集団(一つの大家族)」は、徳之島でも文字どおり「一つの家族」と置き換えられる。バリ同様、家族から2頭の牛を出して互いに闘わせることはない。これは親族同士の牛を闘わせることがないという事実から理解できる。「どんなに強い牛を持っていても、一族の中でつぶしあうことはない」と島人は言う。

また、集落外(島外も含む)の試合で同じ集落の二人の成員が牛を闘わせることは、(5)で「よそから遠征に来た牛同士を徳之島の闘牛場で闘わせることはない」と述べたことの逆である。徳之島の闘牛でもバリの闘鶏と同じく、集落外の試合で同じ集落の二人の成員が牛を闘わせることは、ないのである。

- (7) 個人レベルにおいては、制度的な敵対関係にある人々は、互いに口を利かないし、互いに関係を持たないように心掛けている(この形式的な縁切りの原因は妻の強奪、相続争い、政治的不和などさまざまである)が、彼らは試合のときは、時にはまるで気違いのようにたくさん賭け、また相手の地位の究極的地盤である男の性的属性をあからさまに、直接に攻撃する。

- (8) 中央の賭けの一団は、最も浅い試合のときを除いていつも構造的連帯者から成り立っている。「外部の金」は含まれない。「外部」がどこまでを指すかはもちろんそのときの状況によって異なるが、とにかく主要な賭けには外部の金はいってこない。中心人物が金を集めることができない場合は賭けはなされない。したがって中央の賭けは、特に深い試合において、社会的対立の最も直接であからさまな表現であり、それゆえに中央の賭けも、試合の組み合わせも、あの不安と隠密さと当惑の雰囲気に含まれる。

- (9) 賭けのために借りることはできるが、賭けの中で借りることはできないという借金に関する規則も、同じ配慮から生まれている(バリ人はこのことをよく意識している)。つまり敵からは経済的恩恵を受けてはならないのである。賭博の借金では短期間の借金をかなり多くすることができるが、構造的に言えば、金は常に友人から借りるべきで敵に借りを作ってはならない。

- (10) 二羽の鶏が構造的に自分に無関係か、あるいは中立の場合(前に述べたように二羽が互いに無関係か、あるいは中立であることはほとんどない)、友人や親戚にすらも、誰に賭け

ているのか訊ねてはいけない。何故なら、仮にあなたが彼がどのように賭けているのかを知り、彼のほうもあなたが自分の賭けを知っていることを知り、なおかつあなたが彼とは違う賭けをすれば、そこに緊張が生じるからだ。この規則は明白かつ厳格である。規則を守る際には、かなり手の込んだわざとらしい態度が取られる。少なくともあなたは彼がどんな賭けをしているのか知らないふりをしなければならず、また彼の方もあなたがどんな賭けをしているか知らないふりをしなければならない。

(11) 不本意に賭けることに対しては特別な言葉がある。それは同時に「許してください」を意味する。不本意に賭けることは悪いこととされている。もっとも中央の賭けが小さくてどうしても不本意にならざるを得ない時は、たび重ならないかぎり、ある程度は許される。しかし賭けが大きく、しかも頻繁にやると、「許してください」の乱発は社会分裂を引き起こすことになる。

(12) 事実、制度化された敵対関係は、(原因はいつも他にあるが)しばしば深い試合における「許してください」の賭けで火に油を注ぐ結果となって始まることが多い。同様にこのような関係の終結と正常な社会的交際の再開は、敵の誰かが味方の鶏を支持することによっておこなわれること

がある(しかし実際にはうまくいかない)。

上記(7)~(12)の項目は、賭けに関する項目である。徳之島の闘牛でも、賭けをしていると言われている。筆者は間接的に話を聞いたことがあるだけで、賭けをした人から直接話を聞いたり、賭けをしている現場を見たりしたことはない。よって、闘牛の賭けが徳之島の社会の中でどの程度の位置を占めているのかについては調査不足である。

(13) 帰属意識の絡む厄介な状況は、この異常に複雑な社会体系では当然ながら頻繁に生まれるが、そこでは人は二つあるいはそれ以上のほぼ同等の帰属意識の間にはさまれることがある。その場合、人は、賭けをせずに済むよう一杯のコーヒーを飲むためか何かでその場を離れることが多い。これは同じ状況に置かれたアメリカの投票者を思い起こさせる行動様式である。

徳之島の闘牛を観戦する人々は、全員が賭けをしているわけではない。賭けるのはごく一部の人間である。よって、バリのように帰属意識と賭けという行動があからさまに絡み合う状況はみられない。闘牛の観戦をするだけならばどちらを応援しているのか周りからはわからないので、帰属意識の間にはさまれてその場を離れるという行動はなされない。

しかし、前掲した亀津在住の闘牛愛好家の事例(闘牛大会の際に知り合いの牛主と地元の牛主の牛が対戦することになったので、「どっちを応援したらいいのか困っちゃうよ」と言っていたこと)から、徳之島では賭けという形で帰属意識を表す

かわりに、あいさつまわりがなされているのではないかと考察できる。

(14) 中央の賭けに関係している人々は、特に深い試合においていつもその集団(親族、村その他なんであれ)の指導者たちである。さらに、外側の賭けにかける人々(先の人々も含む)は、既に述べたように村の確かな構成員、堅実な村びとである。闘鶏は日々の威信に関する政治に関わる人たちのためにあり、青年、女性、従属者達のためにあるのではない。

「闘鶏は日々の威信に関する政治に関わる人たちのためにあり、青年、女性、従属者達のためにあるのではない」という分析が、バリの闘鶏の社会学的意味を考えるうえで重要な位置を占めていると筆者は考える。

徳之島の闘牛は、観客席を見渡すと男性客ばかりで、女性の関わりが少ないように感じる。しかしある牛主が「家の奥さんが牛好きでないと強い牛は育たない」という話をしていた。牛の世話をするにも、牛に夢中になる旦那を支えるにも、牛に理解のある奥さんでなければ務まらないからだという。この話から、闘牛に対する女性の関わり的重要性がうかがえる。

また、青年の闘牛への関わりについて言えば、「高校生が『牛の世話をさせてください』と名乗り出て来る」という話が事例として挙げられる。高校生が勢子をするのは徳之島の3高校の間で禁止されている(賭博・喫煙を回避する為)が、牛の世話をすること、闘牛を観戦することは自由である。牛の世話をすることは心の教育に良いという意見もある(水野修、1995)。

(15) 金銭に関してははっきり表明されている態度は、金銭は第二義的問題だということである。先にも述べたように、重要性をもたないということではない。バリ人は他の人たちと同様に数週間分の収入を失うことを嬉しくは思わない。しかし闘鶏の金銭面については、自然に均衡が保たれ、金銭を単に動かすものとして、あるいはまじめな闘鶏家たちの明確な集団の中で金を循環させるものとして考えている。本当に重要な勝敗は主に別の点から考えられている。そして賭けに対する一般的態度は、大儲けや大成功への期待ではなく(賭博耽溺者は除き)馬鹿騒ぎをやる人たちの「神よ、どうぞ損も得もなしにしてください」という祈りの態度である。しかし威信の点からは損得なしは望まれない。一瞬に勝負の決まる完全な勝利を願う。人々の(いつも続けられる)話は、自分の鶏が誰々の鶏との闘いで勝ったということ、いくら儲かったということではない。パン・ローの鶏コンテストでの試合の日のことは何年たっても覚えていたが、いくら儲かったかということは、大きな賭でさえ長い間は覚えていない。

「人々の(いつも続けられる)話は、自分の鶏が誰々の鶏との闘いで勝ったということ、いくら儲かったということではない」これは、徳之島の場合も同じである。牛主達は、持ち牛の戦歴を克明に記憶している。戦歴ばかりでなく、一つ一つの闘いの様子(どんな技を使ってどんな勝負展開で、対戦

タイムが何分何秒であったなど)を詳しく覚えている。賭けの話は、「 が何十万も負けて、1年間奥さんを相手の家にただ働きに行かせた」とか、「ブルドーザーを取られて会社が左前になった」とかいう話を笑い話として聞いたことはあったが、自分が賭けをしていくら儲かったという話は聞かなかった。賭け以外でも、牛の出場料や飼育費、購入金額など金銭の問題は存在するのだが、それらについて耳にすることはほとんどなかった。ということ、徳之島の闘牛もバリの闘鶏と同様、「金銭は第二義的問題」と考えられており、第一義的問題は何か別のものであると言えそうである。

(16) 単なる帰属意識の問題以外の理由からも、自分の集団の鶏に賭けなければならない。というのはそうしないと、人から次のように言われるからだ。「なんてこった。あんまりお偉くって俺たちとは付き合っちゃいけないっていうのか。ジャワやデンパサール(バリ省庁所在地)まで行かないと賭けられないっていうのか。あいつはそんなに立派なやつなのかい」と。世間の圧力で、人は自分がその土地で重要人物だということを示すためだけでなく、他の誰もがライバルとして不足だとして軽蔑するほどには自分は重要なのではないということを示すためにも賭ける。同様に地元の集団の人たちは外部の鶏に対抗して賭けなければならない、さもないと、外部者は、彼らが入場料を取り立てるだけで闘鶏には興味をもっていないのだ、威張っていて無礼だのと厳しい非難を浴びせるのである。

徳之島でも賭けは一部の人たちによっておこなわれていると述べたが、賭けなければならない理由は、バリの場合と異なる。「おまえの(応援する)方の牛が負けると思っているのか」と挑発されて、賭けに乗らなければならない状況に追いやられるのである。賭けに乗るか乗らないかが、すでに勝負なのである。そして、いくら賭けるかも勝負である。仲間を6人集め、ひとり10万円出すとして60万円そろえたとする。そこで相手が100万円に吊り上げ、「牛が勝つと思っているなら100万でも出せるはずだろう」と挑発してきたときに、勝負を受けられるかどうか勝負なのである。牛に対する思い入れの強さと、ファンであればその牛を支持するに至った根拠(眼の確かさ)が試されるのである。

しかし、バリの闘鶏のように徳之島で「外部の牛に対抗して賭ける」ということが熱心になされているかどうかについては、調査不足である。

(17) 最後に、バリの農民は以上述べたことをよく知っていて、少なくとも民族誌学者に対しては、私が述べたとほぼ同じ言葉でそのほとんどを説明することができる。闘鶏について私と話をしたほとんどのバリ人が述べているところによると、闘鶏は、火傷をしない火遊びをするようなものだという。闘鶏をすることによって村や親族の抗争や敵意を激しくすることになるが、それはあくまで「遊び」の形においてである。人と人、集団と集団との公然で直接の攻撃性の表現に近い、恍惚感と危険性をはらんだ状態になるが(それは日常生活では

ほとんど起こらない)、完全な攻撃性が表現されるわけではない。結局それは「単なる闘鶏にすぎない」からである。

徳之島の闘牛は、バリのように「(遊びの形における)攻撃性の表現」としてもちいられるものではないのではないかと、筆者は思う。徳之島の人々は、「闘牛の牛を持つことは一族にとってたいへん名誉なことだ。一族の宝」「地区全体でその地区の牛一頭一頭育てているという感じがある」「島の人達は、単に牛の喧嘩を見て楽しむだけじゃなくて、闘牛を通じて、親族、仲間、近所との交流を深くしているんだ」と闘牛に対する思いを語る。徳之島の闘牛は、「攻撃性の表現」どころか逆に「親密性の表現」なのではないだろうか。

## 第二節 徳之島における闘牛の意味

### 第一項 バリの闘鶏の表すもの

ギアーツは、「闘鶏がもっとも強調するのは地位関係である」と述べている。「ポリネシアの称号の階位とヒンドゥのカーストとが奇妙に融合した、誇りのヒエラルキーともいうべきものが、バリ社会の精神的中枢を形成しているのである」そして、「人間を固定したヒエラルキーの身分の中に嵌め込み、共同生活の大部分をそのはめ込みを軸として組織するといった(バリの)問題全体に、闘鶏は社会的説明を与えている」とした上でギアーツは「闘鶏の機能は、解釈である」と述べている。

また、「そのヒエラルキーの基づいている、本来の自然なままの感情は闘鶏にしか現れない」のであるから、「バリ人が闘鶏に高い評価を与える」と分析している(ギアーツ 1987)。

この、「闘鶏にしか現れない本来の自然なままの感情」とは危険を冒すスリル、敗北の絶望感、勝利

の快感である。「このように示された感情によって社会は組み立てられ、個々人は結びつけられている」とギアーツは述べている。「闘鶏に行き、これに参加することは、バリ人にとって一種の感情教育なのである」(ギアーツ 1987)。

「地位関係」を強調し、「感情教育」の役割を担う。この二つがバリにおける闘鶏の意味であるといえる。

### 第二項 徳之島の闘牛の表すもの

「闘牛は、牛を育てること自体が楽しいし、勝ったらお金まで手に入るし、闘牛愛好家のネットワークもできる」と牛主は闘牛についての魅力を語る。「闘牛愛好家のネットワーク」とは、牛主、ばくろう(牛・馬の売買を専業とする人)、その他全国の闘牛愛好家など、闘牛に関わる人々のつながりのことである。闘牛を巡る人々のつながりは非常に強いものである。大会前日の前祝いには親類、友人が祝いの金品を持って集まってくるのが徳之島の慣例となっている。それらは、翌日の試合に対する祈願の言葉と共に手渡される。「徳之島では応援にこない親戚とは縁を切るそうよ」と沖縄の人は言う。

「島は親戚付き合いを大切にしているから、親戚同士の牛を喧嘩させることはあまりない」そうだ。同じ地区同士の牛を喧嘩させることもあまりないという。その理由は、「地区全体でその地区の牛一頭一頭育てているという感じがある」からである。

徳之島の闘牛が強調するのは「親密性」ではないかと思う。徳之島はバリと違い、地位による区別がはっきりとなされている社会ではないので、闘牛を用いて地位関係を強調する必要がない。それどころか上記の事例を元に考えると、横のつながりを強調しているように思う。これは徳之島に古くからある、「ナキャワキャの精神」と呼ばれる「皆で喜びも苦労もわかちあう」という精神がもたら

なっていると考えられる。

「感情教育」の役割は、徳之島の闘牛にも当てはまると思う。闘牛を観戦することで、筆者も感情の高ぶりを経験した。牛の闘う姿を見ることで、勝利を喜ぶ人々を見ることで、あるいは敗北を嘔みしめる人々を見ることで、日常では経験することがほとんどない、胸の奥からこみ上げてくる感情を味わった。「牛の世話をすることは心の教育に良い」(水野修 1995)という意見もあることを含めて考えると、徳之島の闘牛も、バリの闘鶏と同様「感情教育」であるといえる。

よって「親密性」を強調し、「感情教育」の役割を担う。この二つが徳之島における闘牛の意味であるといえる。

## 第五章 結論

バリ社会は、「人間を固定したヒエラルキーの身分の中に嵌め込み、共同生活の大部分をそのはめ込みを軸として組織」したものであり、その仕組みについて「闘鶏は社会的説明を与えている」のである。「闘鶏の機能は、解釈」であり、「彼ら自身による彼ら自身の物語」であるとギアーツは述べている(ギアーツ 1987)。

また、闘鶏以外の場所では嫉妬や残忍さといった「本来の自然なままの感情」は現れない。「闘鶏がなければ、バリ人はこれほどまでにこれらの感情を理解しなかったであろう」とも述べている(ギアーツ 1987)。

つまり、バリにおける闘鶏の意味は「地位関係」を強調し、「感情教育」の役割を担うことである。

ではバリにおいて闘鶏は「親密性」を弱める働きをするのかということ、そうではない。普段村の中でおこなう「うちの試合」が村の派閥を統合するよりも対立させ、悪化させがちな村の成員間の不和を、たまによそから来た鶏と闘う「出張試合」が

改善する傾向にあるのである(ギアーツ 1987)。他を攻撃することで内部の親密性を強めるのである。

徳之島において闘牛は「親密性」を強調する。あいさつまわりに奔走し、勝利の喜びと敗北の絶望感を仲間全員で共有する。地区全体で牛一頭一頭を育てているという意識を持つといった事例が「親密性」の強調を示している。

また闘牛に関わることによって、日常では経験することがほとんどない、胸の奥からこみ上げてくる感情を味わうことができる。牛と牛の真剣勝負に、飾らない魅力を学ぶのである。

つまり、徳之島における闘牛の意味は「親密性」を強調し、「感情教育」の役割を担うことなのである。

## 謝辞

本稿を作成するにあたっては、たくさんの方々にお世話になるとともに多大な迷惑をおかけいたしました。

まず、徳之島に滞在中、いろいろな場面に筆者を連れ出し、様々な示唆を与えてくださった寛山幸枝様、お忙しい中たくさんの時間を裂いてくださって本当にありがとうございました。闘牛だけでなく、島の人々について考える機会を数多く経験したことで、良い人生経験となりました。

また、重原ひろみ様には徳之島に滞在中、宿を提供していただきありがとうございました。たくさんのご迷惑をおかけしてしまったことをこの場を借りてお詫び申し上げます。

そして、闘牛愛好家の遠藤智様にはお忙しい中牛主に引き合わせていただいたり、闘牛ビデオその他たくさんの資料を見せていただいたりと、惜しみない協力をしていただきました。心より御礼申し上げます。

石垣島の玉代勢泰寛様、光子様ご夫妻にも、貴重

な話をさせていただきだけでなく、心身両面でお世話になりました。

与那国島の入波平浩様、輝美様ご夫妻には、島での人付き合いについてお叱りをいただき、感謝しております。

与那国闘牛組合長の仲本泰邑様、無理を聞いてもらい闘牛の世話をさせていただいてありがとうございました。

北九州大学文学部の山本雄大君には、与那国の人々と引き合わせていただいたことを感謝してお

ります。

また、ゼミ仲間である重森誠仁君には卒論作成にあたり力を貸していただきありがとうございました。大きな負担をかけてしまったことをお詫びいたします。

最後になりますが、私の指導教官である竹川大介先生には、論文作成だけでなく、生き方についても数々の刺激を受けました。いろいろとご迷惑をおかけしたことをお詫びするとともに、感謝の意を表したいと思います。

## 引用文献

- 『徳之島小史』坂井友直編 徳之島民族学会 1963
- 『城辺町誌』城辺町誌編集委員会 1966
- 『郷土資料第七集 概説徳之島史』小林正秀 徳洲新聞社 1967
- 『沖縄の闘牛』前宮清好 1972
- 『奄美生活史』恵原義盛 発行者田中嘉次 発行所図書出版木耳社 1973
- 『奄美民族文化の研究』小野重朗 財団法人法政大学出版局 1982
- 『徳之島の闘牛』松田幸治 松田幸治編 南國出版 1982
- 『徳之島の闘牛』米川正雄 松田幸治編 南國出版 1982
- 『徳之島の闘牛』松山光秀 松田幸治編 南國出版 1982
- 『南島雑話1・2』名越左源太 平凡社 1984
- 『徳之島の今と昔と方言しらべ』浜田敬助 1986
- 『文化の解釈学』C・ギアーツ著 吉田禎吾、柳川啓一、中牧弘允、板橋作美訳 岩波書店 1987
- 『ザ・闘牛』水野修編 潮風 1995
- 『闘牛の島』小林照幸 発行者佐藤隆信 発行所株式会社新潮社 1997
- 『潮風44号』加川徹夫 水野修編 潮風出版 1999
- 『闘牛と長寿のふるさと 徳之島』徳之島観光連盟 1999
- 『Coralway』日本トランスオーシャン航空 1999